

令和 4 年 5 月 19 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17H02294

研究課題名(和文) 16世紀イスパニア世界における帝國的空間と「境界的」美術の形成

研究課題名(英文) The Spanish Global Empire and "Arts In Between"

研究代表者

岡田 裕成 (Okada, Hiroshige)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：00243741

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,600,000円

研究成果の概要(和文)：1492年に達成された国土再征服と、新大陸航路の発見という二つの重大事を象徴的な契機として、ヨーロッパの周縁に位置したスペインは、16世紀を通して広大な帝国を構築する。その帝国は、アイデンティティを異にする様々な人びとを統合する文化の交通空間であり、ここでは、多様な図像文化や造形様式、技法・素材が、時に起源の差異を超えて組み合わせられ、あるいは、本来とは異なる意味のもとに解釈・転用された。本研究はその「境界的」な美術の諸相を、歴史的な経緯と地理的広がり両面から体系的に明らかにし、その成果を、国際共著論文集『帝国スペイン 交通する美術』にまとめた(2022年5月刊行予定)。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヨーロッパにおける美術史学は概ね19世紀以来、各国別の記述を中心としたナラティブとして発展してきた。しかしそれは、近代のナショナリズムを深く刻印したものであり、そこには世界規模の植民地主義や、そのイデオロギーに根ざした世界観もまた色濃く投影されている。さまざまな主体の意図や利害が複雑に絡み合う相互作用の場としての交通の空間に注目し、美術という表象の構築物がそこで果たした役割を具体的に検証した本研究は、美術史学の領域においてユニークな意味をもつのみならず、グローバル化する世界に直面する今日の日本社会に求められる、歴史的知見の拡張にも貢献するものである。

研究成果の概要(英文)：After two outstanding historical achievements realized in 1492, the completion of "Reconquista" and the discovery of an ocean route to the "New Continent", Spain followed a path to construct a global empire. This empire was a space of cultural exchange where various kinds of iconographical images, representational style, and artistic materials and techniques circulated. Those elements of different origins were occasionally combined, and were manipulated and appropriated out of their own historical context. This research project examined systematically the aspects of such "arts in between" from the point of view of historical contexts as well as of geographical expansion. The fruit will be published in May, 2022.

研究分野：美術史学

キーワード：グローバルアート スペイン ラテンアメリカ アジア太平洋 美術史

1. 研究開始当初の背景

近年の美術史学において、グローバルな美術の交通は重要な研究課題となっている。なかでも注目される領域の一つが、征服後の新大陸へのヨーロッパ美術の移転をめぐる諸問題だ。新大陸の植民地美術については近年、特に欧米において、重要な出版物の刊行や主要美術館における大規模な展覧会が相次いでいる。そうした中で、ロサンゼルス・カウンティ美術館で開催された展覧会“**Contested Visions in the Spanish Colonial World**”(2011年)などが提起する、文化的アイデンティティの境界を超えた美術の移動・再解釈の問題は、すぐれて今日的意味をもつ研究課題として広く注目されている。

申請者は、平成26年度より3年間にわたり助成を受けた「初期近代植民地美術における『文化境界上の現象』:事象研究と方法論の探求」(科学研究費基盤研究(C))、及び、これに至る数次の科研プロジェクトにおいて、新大陸植民地美術における「他者」との交渉をめぐる問題を一貫して研究してきた。その成果は、米国で刊行された重要な通史書への寄稿や、国内での出版物において順次公にしている(L.E. Alcalá, 岡田裕成他共著 *Painting in Latin America, 1550-1820*, Yale University Press, 2015; 岡田裕成『ラテンアメリカ 越境する美術』筑摩書房 2014年など)。

これら一連の研究を通して申請者は、地理的に拡張する「帝国」の美術をめぐる「境界的」な現象を理解するには、その帝国の成立の原点ともなった歴史的経験の理解が不可欠であることを認識するに至った。新大陸の征服と「他者」の文化の統合は、同じ時期に完了をみた対イスラム教徒国土再征服運動と深く結びついている。中世を通しての「他者」との交渉の経験は、初期近代のグローバルな帝国の美術を理解する重要な要素である。今回申請する計画はこうした認識をもとに、関係分野を網羅する国際的な研究組織を構成し、多様な美術の交渉の場としてのイスパニア世界の歴史的な成り立ちと、その交通の実態、全体としての連関のありようを検証するとともに、多様な「境界的」美術がどのようにして作り出されたのかを明らかにしようとするものである。

2. 研究の目的

1492年に達成された国土再征服と、新大陸航路の発見という二つの重大事を象徴的な契機として、ヨーロッパの周縁に位置したスペインは、16世紀を通して広大な帝国を構築する。その帝国は、アイデンティティを異にする様々な人びとを統合する文化の交通空間であり、そこでは、多様な図像文化や造形様式、技法・素材が、時に起源の差異を超えて組み合わせられ、あるいは、本来とは異なる意味のもとに解釈・転用された。本研究は、スペインを中心とするイスパニア世界に成立した、その「境界的」な美術の諸相を、歴史的な経緯と地理的広がり両面から体系的に明らかにする。

3. 研究の方法

上記の前提・問題意識に基づき、本研究は次の3点から研究を進めた。

1) 「イスラム的なもの」の再解釈/転用のメカニズムの解明: 対イスラム教徒国土回復運動の進行とともに、イスラム由来の建築様式や造形要素がキリスト教地域に流入した。この過程は従来「ムデハル様式」のカテゴリーのもと単純な影響論によって説明されがちであったが、近年その論は批判的に検証されつつある(Ruiz Souza, “Architectural Languages, Functions, and Spaces: The Crown of Castile and Al-Andalus”, *Medieval Encounters*, vol.12, 2006)。とりわけ、イベリア半島の「脱中世」と「帝国」の形成が進行した16世紀は、スペイン本国におけるイスラム建築の再利用、新大陸植民地への「ムデハル様式」の移転など、イスパニア世界における「イスラム的なもの」の再解釈/転用が多様なかたちで展開する。例えば中世の多くのモスクは、再征服後キリスト教聖堂に転用され、ヨーロッパの建築様式を複合する改修がなされた。これらは異教徒への勝利を示す政治的意図や、植民地における「本国らしさ」の演出といった「帝國的」な文化のメカニズムと深く関わっている。本研究は、近年の「ムデハル」論批判の動向を総括した上で、グローバルな展開を含む「イスラム的なもの」の16世紀的再解釈と転用の事例を系統的に収集整理し、その過程に作用した力関係や美術史的なメカニズムを解明する。

2) 拡張するイスパニア世界における「他者」の美術の統合: イスパニア世界は、新大陸植民地に加え、メキシコ・マニラ間の太平洋定期航路によりアジア海域とも結ばれた。その結果、日本の屏風形式と新大陸植民地の図像モチーフ、あるいはアジア系文様とイスラム由来の意匠といった、「帝国」の枠組みがなければ組み合わせられるはずのなかった主題、様式、技法、素材の諸要素を結合した、いわば「人工的エキゾティシズム」とでも形容すべき作品が作りだされ、流通することになる。こうした作品は近年、欧米の美術館を中心に新出作品の発見・収蔵が進んでいる。そうした作品も視野に置き、広く16世紀イスパニア世界に統合された「他者」の美術の図像や様式、技法・素材が、支配文化としてのヨーロッパ美術にいかに関り込まれたのかを、メキシコ、アンデス、マニラなど植民地間交通の主要地点の事例を中心に、具体的に明らかにする。同時に、上記1の課題で取り上げる「イスラム的なもの」の再解釈/転用の事例を含めた「境界的」美術の相互の比較を行い、共同研究としての包括的な展望を提示する。

3) 「本国」たるスペインをめぐる「境界的」美術の再検討: 16世紀イスパニア世界は、歴史軸においてはイスラムと交渉した中世、空間軸においては植民地の「他者」と接続するが、その一方で、ルネサンス人文主義を軸としたヨーロッパ初期近代美術の枠組みの中にも位置づけられ

る。その複雑な文化地理の枠組みのもとで、どのような美術の移動(芸術家や美術コレクション、主要作品など)が起こったのか、その動態を作品・事例から具体的に検討する。また、初期近代スペインのキリスト教美術に関する最近の研究は、新大陸植民地の事例なども統一的に論じることで、従来の枠にとどまらない成果を挙げつつある(R.Kasl ed., *Sacred Spain: Art and Belief in the Spanish World*, Yale Univ. Pr., 2009 他)。本研究はこうした成果も踏まえつつ、ヨーロッパ域内及びグローバルな交通の視点から、スペイン本国の初期近代美術の見直しをおこなう。

4. 研究成果

上記の目的と方法に基づき共同研究を進め、その成果を研究代表者の編纂による国際共著論集にまとめた(岡田裕成編『帝国スペイン 交通する美術』、2022年5月、三元社より刊行予定)。論集は3部からなる。

第1部: 中世との接続

大法官ガッティナラの言を借りるならば、カルロス1世(カール5世)の帝国はシャルルマーニュ以来の「普遍的君主国」を実現するものであった。帝国には中世的・メシア論的なヴィジョンが色濃く投影されている。そのメシア論的なヴィジョンは、イスラム勢力の支配を経験したイベリア半島の中世の経験と、むしろ深く結びついている。

カルロスは一五二六年、中世アンダルスの文化の遺産が数多く残るセビーリャ、コルドバ、グラナダなどスペイン南部のアンダルシア-----この地名は「アンダルス」に由来する-----の諸都市を訪問した。この時、グラナダでの宿所となったアルハンブラ宮殿の敷地内には、まもなくカルロスの命によりルネサンス様式の新宮殿の建設が始まる。それはまさに、異教徒に対する勝利のモニュメントであった(Brothers 1994)。アルハンブラのイスラム宮殿に魅了されたカルロスは、その美しい建築を破壊することはなかったが、新たに建設されたルネサンス宮殿は、峻厳な外観と際立った規模によってイスラム宮殿を圧倒している。

新宮殿の建設に先立ち、イスラム宮殿内に準備されたカルロスのための居室群にも、図像を用いたイデオロギーの表明がなされていた。寝室の壁に刻まれたカルロスの紋章は、かの「さらに彼方へ(Plus Ultra)」のモットーと、ジブラルタル海峡を示す「ヘラクレスの柱」の図像の下に地球儀のモチーフを置き、そこにアフリカ大陸を大きく描きだしている。これは、レコンキスタを完了した祖父母カトリック両王の業績を受け継ぎ、ムスリムの勢力圏に対するさらなる進撃を図る意思を示したものに他ならない(Rosenthal 1974)。

とはいえ、アンダルスの遺産に対する帝国の反応は、キリスト教徒対ムスリムといった単純な二元論にのみ閉じるものではない。そのことは、近年さまざまな論者によって強調されるところだ。本書の第一部はそうした視点も織り込みつつ、イベリア半島の中世と帝国がいかに接続されたのか、その多様なニュアンスに富む過程を検討している。

研究分担者・伊藤喜彦の論考「大モスクから大聖堂へ 中世イベリア半島キリスト教都市におけるイスラム建築遺産とその変容」は、キリスト教化された諸都市における、大モスクの破壊や改築の歴史を取り上げる。議論の焦点は、十三世紀に相次いでキリスト教化されたコルドバとセビーリャの大モスクだ。キリスト教徒に征服された諸都市で大モスクが次々と取り壊されていったなか、この二つの都市では、大聖堂への転用後も大モスクの建築が相対的によく保存された。とりわけコルドバの大聖堂は印象的だ。水平的に広がる大モスクの構造を残しつつ、その中央部からいかに唐突に、ゴシックとルネサンスの様式を基調とする垂直的なキリスト教聖堂が立ち上がる。セビーリャ大聖堂も、大モスクのミナレットなどイスラム時代に由来する部分を効果的に利用している。伊藤論文はこれらの特徴を、他の諸都市の場合と比較しつつ詳しく検討する。そこに浮かび上がるのは、イスラムの造形的伝統に対する敵意と敬意が絡み合ったスペインのアンビヴァレントなイスラム文化観だ。

研究協力者・マリア・フェリシアノ(2018年招聘)の論考「中世アンダルス美術の遺産 その存在と不在を読み解く」は、こうしたアンダルス美術の遺産の継承をめぐる問題を、近代美術史学の言説についての批判的な検証も踏まえ、深く問い直す。まず問われるのは、「ムデハル様式」という概念の正当性だ。スペインの美術史において、「イスラムの影響」に由来する「ムデハル様式」をユニークな「国民的様式」とみなす議論は、長らく自明のものとして広く受け入れられてきた。だが、ナショナリズムのバイアスも露わなこの概念をどう評価するのかは、近年専門家のあいだで改めて大きな論争となっている。フェリシアノは、建築史家ルイス・ソウサらとともに、このムデハル美術論批判を先導する最も先鋭的な論者として知られる。

フェリシアノは、ムデハル様式とされる造形要素がムスリムの制作者による民族的伝統の表明と単純に考えることを繰り返し批判する。イスラム的な造形に由来する作品が、キリスト教徒の注文主の意向に基づき、キリスト教徒の制作者の手で制作されることも何ら珍しくなかった。「イスラム風」趣味は、ムスリムたちだけのものではなかったのだ。こうした見方は、コルドバの大モスクなど一部のイスラム建築にスペイン人が抱いた特別の愛着に注目する伊藤の論とも響き合う。そのうえでフェリシアノは、植民地メキシコのスペイン人征服者たちがイスラム風の服飾文化を巧みに利用したことも指摘し、アンダルスの遺産のグローバルな展開に論を進める。

研究分担者・久米順子の論考「『キリストの戦士』としてのサンティアゴ・マタモロスと拡大するイスパニア世界」が問うのは、図像化されたアイデンティティをめぐる問題だ。久米は「ムスリム人殺し(マタモロス)」のサンティアゴの図像を取り上げ、中世以来のスペイン社会におい

て、ムスリムとの戦いのイメージがどのような役割を果たしたのかを詳細に跡づける。

多くが北アフリカ・マグリブ地域からやって来たムスリムたちは、この地域の人々を指した「モーロ人」の名で総称された。「サンティアゴ・マタモロス」は、そのムスリムたちとの戦いに、キリストの騎士たる聖ヤコブ（サンティアゴ）が加勢したとする奇蹟をあらわした図像だ。久米は図像の起源とそのヴァリエーションを概観したうえで、このイメージが、レコンキスタを進めたカスティーリヤの王権と深く結びついていたことを明らかにする。この図像が成立したのは中世だが、それが広く普及したのはむしろ十六世紀、カルロス一世の時代であった。

帝国へと生まれ変わるスペインにおいて、中世アンダルスの遺産はしばしばアンビバレントな両義性を帯びた。そのなかにあって、ムスリムと戦うキリストの騎士の奇蹟の図像は、帝国のヴィジョンの最も先鋭な部分を示しているように思われる。久米も指摘する通りそれは、カルロスの好敵手たるスレイマン一世（在位一五二〇-一五六六）に率いられたオスマン帝国が、眼前の脅威としてヨーロッパに迫っていたことと無縁ではない。ここで中世の記憶は、カルロスの帝国が向き合った現実そのままにそのまま接続された。

第 部 ハプスブルク・スペインとヨーロッパ

カルロスの帝国のヨーロッパにおける版図は、スペインに加え、ブルゴーニュ公として相続したネーデルラント、アラゴン連合王国が中世以来領有したイタリア半島南部やシチリア島、ハプスブルク家の本領オーストリア、そして神聖ローマ皇帝として君臨したドイツにも及んだ。一五五六年、カルロスの退位にともないスペイン国王に即位したフェリペ二世（一五二七-一五九八）は神聖ローマ帝国の帝位を受けず、オーストリア、ドイツの所領を相続することはなかった。しかしその一方で彼は、帝国各地を生涯駆け巡った父とは対照的に、マドリッドを宮廷常駐の地と定めて王宮整備を進め、さらにエル・エスコリアルに王家の墓所ともなる巨大な修道院を造営した。フェリペ二世の時代、帝国はその中心の所在を、モニュメントや美術コレクションを通して可視化していったのだ。第 部「ハプスブルク・スペインをめぐる美術の交通」は、その過程を三篇の論考を通して検討する。

研究分担者・今井澄子による冒頭の論考「帝国スペインにおけるタピスリー　ネーデルラント総督マリアの仲介と『ブランド』の形成をめぐる」は、皇帝カルロスの宮廷においてネーデルラントのタピスリーが果たした大きな役割を論じる。今井が注目するのは、カルロス一世とその子フェリペのバンシュ滞在だ。

一五四九年、カルロス一世とフェリペはともにネーデルラントを訪問した。これは、当時王太子であったフェリペが、将来ネーデルラントの統治者となることを公に披露するためのもので、ブリュッセル南方のバンシュの宮殿において、訪問のハイライトとなる盛大な祝宴が行なわれた。これを差配したのはネーデルラント総督マリアで、宮殿の装飾には彼女が数多く所有したタピスリーが効果的に用いられた。今井はその分析をもとに、カルロスの故国であるブルゴーニュ公国の華やかな宮廷文化と深く結びつくタピスリーの芸術が、「ブランド」としての価値を帯びて帝国スペインの美術に取り込まれる過程を明らかにしている。

研究分担者・松原典子による論考「ポンペオ・レオーニとスペイン　エル・エスコリアル修道院聖堂主祭壇衝立の《磔刑》群像をめぐる」が取り上げるのは、イタリア美術との関係だ。松原は、スペイン・イタリア両国それぞれの美術史研究の谷間にあって、あまり注目を浴びることのなかった彫刻家ポンペオ・レオーニに注目する。ポンペオは、ミラノを拠点に活躍した同じく彫刻家で、カルロス一世に重用されたレオーネ・レオーニの子として生まれ、自身もブリュッセルの宮廷で皇帝の知遇を得た。その後スペインに渡った彼は、新国王フェリペ二世のもと、王が精魂を傾けた巨大な建築的モニュメント、エル・エスコリアル修道院聖堂の装飾に携わる。同時に彼は、スペインにそれまでなかった本格的なブロンズ鋳造工房をマドリッドに開設した。松原はそのポンペオが、エル・エスコリアル修道院聖堂の主祭壇衝立のために制作したキリスト磔刑の群像を仔細に検討して、それがルネサンス的なブロンズ人体彫刻の理想に必ずしもこだわるものではないこと、むしろ、カトリックの盟主たるスペインとその王族の加護と救済を祈るフェリペ二世の意図が、作品の造形に色濃く投影されていることを指摘する。

以上の今井と松原の論考は、カルロス一世とフェリペ二世、あるいはネーデルラントとイタリアという、ハプスブルク・スペインの宮廷をめぐる美術の交通の焦点をなした重要な主体を往還する。

研究協力者パク・ジョンホ（2019年招聘）による論考「エル・グレコ裸体表現の再検討　クレタからスペインへ」は、これに対し、十六世紀ヨーロッパの「移動する芸術家」のなかでもとりわけ個性的な存在であるエル・グレコを取り上げる。

エル・グレコはかつて、スペインにあってヨーロッパの主流的な美術史の枠を踏み越えたエキセントリックな画家とみなされたこともあった。しかし今日では、イタリアのルネサンス・マニエリスム美術の深い理解者とする評価が支配的だ。近年エル・グレコの研究者として優れた成果を挙げるパクは、この画家の芸術の核心をなす人体造形、とりわけ裸体表現が、クレタ、イタリア、そしてスペインという異なる環境のもと、どのように変化していったのかを丹念に検討する。そこに浮かび上がるのは、文化的な差異や落差を冷静に認識し利用する、移動する画家の巧みな戦略だ。

第 部 「世界帝国の美術」

一四九二年に大西洋を横断する航路が開拓されておよそ三〇年の一五二一年、スペイン人征服者エルナン・コルテスは、メソアメリカの覇者アステカ王国の都テノチティラン（現メキシコ市）を攻略した。一五三〇年代には、南米アンデスのインカ帝国もほぼ征服された。これらの征服地は、ヌエバ・エスパーニャ副王領とペルー副王領という枠組みのもと、植民地統治が整備されていく。さらにメキシコから太平洋を渡ったスペイン人は、フェリペの名を冠した「フィリピン」（スペイン語名「ラス・フィリピーナス」）の探査を進め、一五六五年には太平洋を横断する定期航路を開設した。

そのフェリペは、一五八〇年にはポルトガルの王位を継承し（ポルトガル国王としてはフェリペ一世）、喜望峰を回るインド航路からマカオにまで至る各地の拠点よりなるポルトガルの海上領土も手中にした。同君連合として両国が一定の独立性を保ったフェリペの帝国は、けっして一元的な統治を実現するものではなかったが、こうして世界をぐるりと一周する交通の空間が実現したことの意義は大きい。第 部は、このまさにグローバルな空間における美術の交通を、異なる地域の多様な事例を通して検討する。

研究代表者・岡田裕成の論考「マドリッド王宮のインカ王像 イメージのグローバルな交通と世界帝国の表象」は、南米アンデスのペルー副王領で制作された、インカの王とその歴史に関わる四点の失われた絵画作品を取り上げる。国王の代理人である植民地の副王フランシスコ・デ・トレドの命で制作されたその作品群は、「暴君」としてのインカについての「情報」を収集し報告する大型の絵であった。絵は国王に献呈され、マドリッド王宮宝物館の「第五室」に陳列された。そこは、ヴェネツィアの巨匠ティツィアーノの手になるカルロス一世の大作騎馬像や、レバント海戦の勝利を記念するフェリペ二世の寓意肖像が置かれる特別な部屋でもあった。論考は、カトリックの盟主たる帝国を賛美するメシア論的なヴィジョンと、「情報」に基づく近代的な植民地統治の技術に関わる他者のイメージが、いかにして宮廷の特権的な空間で出会うことになったのか、その経緯を明らかにする。

研究協力者アルベルト・バエナ・サパテロ（2017年招聘）による論考「新大陸アメリカにもたらされたアジアの『屏風/ピオンボ』 その流通と影響」は、マニラ、マカオとメキシコのあいだの屏風作品の流通が、いかに活発であったのかを明らかにする。植民地史の専門家である著者は、メキシコのスペイン系エリートの文化、とりわけ女性の文化についての業績を重ね、そのなかで、富裕な植民地人の邸館にアジアの美術品が数多く収集されていたことに注目するようになった。この分野をリードする研究者である彼は、本書の論考で、日本や中国に由来する屏風作品の取引の記録、マニラやメキシコのスペイン人の財産目録などの一次史料をふんだんに用いて、アジアに目を向けたそのコレクションが、本国とは異なる植民地の文化的なアイデンティティの形成に大きな影響を与えたことを指摘する。

研究協力者・川村やよい（2018年招聘）による論考「大海洋を渡った日本の蒔絵螺鈿 マニラ、メキシコ、スペイン」は、やはり太平洋を経由した美術品の移動の問題を、漆器をテーマに論じる。川村は、オビエド大学の教員として長年にわたり輸出漆器、とりわけスペイン所在の作品について広範な調査をおこなってきた。本書の論考で川村は、十六-十七世紀スペインの美術コレクションのなかでの日本製漆器の所在を概観したうえで、マニラ・ガレオン交易が美術品の移動に果たした大きな役割を詳しく明らかにしている。さらに、スペインへの中継点となったメキシコにおいて作品になされた加工、あるいは、そのメキシコに残された日本の漆器の影響など、移動の過程に生じた現象についても議論が及ぶ。バエナの論考とともに、この川村論文は、現存作品と史料の両面から詳細な検討をもとに、これまで必ずしも十分に認識されてこなかった日本の美術品のグローバルな移動をめぐる具体的な状況について、さまざまな知見を提供している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岡田裕成	4. 巻 42
2. 論文標題 フェリペ二世のコレクション スペイン世界帝国を表象するイメージと「もの」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美術フォーラム21	6. 最初と最後の頁 15-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡田裕成	4. 巻 2
2. 論文標題 《レバント戦闘図屏風》：主題同定と制作環境の再検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 香雪美術館研究紀要	6. 最初と最後の頁 27-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤喜彦	4. 巻 6
2. 論文標題 大陸を結ぶ、海をつなぐ - 海峡都市セウタと中世ジブラルタル海峡 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 都市史研究	6. 最初と最後の頁 60-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 5件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 岡田裕成
2. 発表標題 "Imágenes negociadas": Los "panos" del virrey Toledo y las primeras representaciones del Inca
3. 学会等名 Congreso de Arte Virreinal: El Futuro del Arte del Pasado (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤喜彦
2. 発表標題 ジローナのサン・フェリウ聖堂の建築的・都市的変容 - クレリック・アーバニズム：イベリア半島中世都市の形成・整備における宗教勢力の役割(2)
3. 学会等名 日本建築学会大会（北陸）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡田裕成
2. 発表標題 Viceroy Toledo Reforms and Location of Art in the Andean Indigenous Communities
3. 学会等名 International Congress of Americanists（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松原典子
2. 発表標題 エル・エスコリアルスの画家たちと王立アカデミー創設をめぐる
3. 学会等名 スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伊藤喜彦
2. 発表標題 大陸をつなげる、海をつなぐ 中世ジブラルタル海峡圏の都市
3. 学会等名 都市史学会大会シンポジウム「海峡と都市 交流と分断の舞台」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 久米順子
2. 発表標題 Arte en el Toledo medieval: convergencias y divergencias
3. 学会等名 The 8th International Medieval Meeting Lleida
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 久米順子
2. 発表標題 カトリック王と宗教的マイノリティ集団：写本挿絵にみるカスティーリャ王国アルフォンソ10世とその宮廷
3. 学会等名 早稲田大学中世・ルネサンス研究所「中世スペインの王権と宗教的マイノリティー」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡田裕成
2. 発表標題 Momoyama Japan and the Artistic Contacts via Asian and Transpacific Sea Lanes
3. 学会等名 国際ワークショップ・桃山の日本とアジア・太平洋海域における美術の交通（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 久米順子
2. 発表標題 “ムデハル美術”を振り返る その功罪をめぐって
3. 学会等名 スペイン史学会第39回大会「ムデハルとは何か？ 中世スペインの宗教・文化的多様性をめぐる議論と展望」（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松原典子
2. 発表標題 対抗宗教改革期のスペインにおける宗教図像 宮廷説教師パラビシーノと宗教画における裸体描写をめぐって
3. 学会等名 早稲田大学ヨーロッパ中世研究所第8回シンポジウム「宗教改革期の図像」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伊藤喜彦
2. 発表標題 La arquitectura del reino de Leon del siglo X: el mito y la realidad de lo 'mozarabe'
3. 学会等名 東京外国語大学第3回国際コロキウム「異なる視野から見たヨーロッパ中世：理論と方法論の諸問題」（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伊藤喜彦
2. 発表標題 「ムデハル建築」は存在しない？ キリスト教建築とイスラーム建築との影響関係をめぐって
3. 学会等名 スペイン史学会第39回大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計18件

1. 著者名 今井澄子、杉山美耶子、木川弘美、ティル＝ホルガー・ボルヒェルト、田中久美子、石井朗	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ありな書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 ネーデルラント美術の宇宙	

1. 著者名 美学会、岡田裕成他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 768
3. 書名 美学の事典	

1. 著者名 ラテンアメリカ文化事典編集委員会、岡田裕成他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 780
3. 書名 ラテンアメリカ文化事典	

1. 著者名 齋藤 晃、ギジェルモ・ウィルデ、折井 善果、新居 洋子、中砂 明德、真下 裕之、岡田 裕成、小谷 訓子、岡 美穂子、網野 徹哉、鈴木 広光、王寺 賢太、金子 亜美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 554
3. 書名 宣教と適応	

1. 著者名 スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会、松原典子、大高保二郎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会	5. 総ページ数 437
3. 書名 フランシスコ・パチエーコ著『絵画芸術』産所概要・抄訳、図像編全訳、論考	

1. 著者名 伊藤 喜彦、額原 澄子、岡北 一孝、加藤 耕一、黒田 泰介、中島 智章、松本 裕、横手 義洋	4. 発行年 2020年
2. 出版社 彰国社	5. 総ページ数 152
3. 書名 リノベーションからみる西洋建築史	

1. 著者名 川瀬祐介編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 国立西洋美術館、読売新聞東京本社	5. 総ページ数 333
3. 書名 ロンドン・ナショナル・ギャラリー展	

1. 著者名 久米順子、松原典子ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 390
3. 書名 スペイン美術史入門 積層する美と歴史の物語	

1. 著者名 久米順子ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 CSIC	5. 総ページ数 355
3. 書名 Medieval Europe in Motion: la circulacion de manuscritos iluminados en la Peninsula Iberica	

1. 著者名 久米順子ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Pages Editors	5. 総ページ数 318
3. 書名 Els animals a l' Edat Mitjana	

1. 著者名 伊藤喜彦ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 400
3. 書名 地中海を旅する62章 歴史と文化の都市探訪	

1. 著者名 九州国立博物館、岡田裕成他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 西日本新聞社、TNCテレビ西日本	5. 総ページ数 216
3. 書名 大航海時代の日本美術	

1. 著者名 Fundacion Vision Cultural,ed. Hiroshige Okada, et.al	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Fundacion Vision Cultural	5. 総ページ数 408
3. 書名 Barroco. Mestizaje en dialogo	

1. 著者名 Cabanas, M., Rincon, W. (eds.), Kume, J., et al	4. 発行年 2017年
2. 出版社 CSIC, Madrid	5. 総ページ数 516
3. 書名 Imaginario en conflicto: Lo español en los siglos XIX y XX	

1. 著者名 木下亮(編), リカル・ブル, 久米順子, 仮屋浩子, 伊藤喜彦, 八嶋由香利, 副田一穂, 吉本由江, 小倉康之, 岸みづき, 木下亮, 松原典子, 松田健児, 田澤耕, 福島睦美, 阿部大輔, 鳥居徳敏	4. 発行年 2017年
2. 出版社 竹林舎	5. 総ページ数 456
3. 書名 バルセロナ カタルーニャ文化の再生と展開	

1. 著者名 川瀬佑介, 読売新聞社(編), 岡田裕成, 久米順子, 松原典子他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 プラド美術館・国立西洋美術館・読売新聞社	5. 総ページ数 402
3. 書名 プラド美術館展 ベラスケスと絵画の栄光	

1. 著者名 松原典子(監修)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 95
3. 書名 ベラスケスとプラド美術館の名画	

1. 著者名 大高 保二郎、川瀬 佑介	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東京美術	5. 総ページ数 96
3. 書名 もっと知りたいベラスケス	

〔産業財産権〕

〔その他〕

art historian's studio (Hiroshige Okada Website) http://www.let.osaka-u.ac.jp/~okada/ahs/ 岡田裕成ウェブサイト http://www.let.osaka-u.ac.jp/~okada/ahs/
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松原 典子 (Matsubara Noriko) (10338428)	上智大学・外国語学部・教授 (32621)	
研究分担者	川瀬 佑介 (Kawase Yusuke) (40635124)	独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・学芸課・主任研究員 (82622)	
研究分担者	伊藤 喜彦 (Ito Yoshihiko) (40727187)	東京都立大学・都市環境科学研究科・准教授 (22604)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	久米 順子 (Kume Junko) (60570645)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授 (12603)	
研究分担者	今井 澄子 (Imai Sumiko) (20636302)	大阪大谷大学・文学部・教授 (34414)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 Art History at the Crossroads: From Medieval Islamic Spain to the New World	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 Momoyama Japan and the Artistic Contacts via Asian and Transpacific Sea Lanes	開催年 2017年～2017年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関